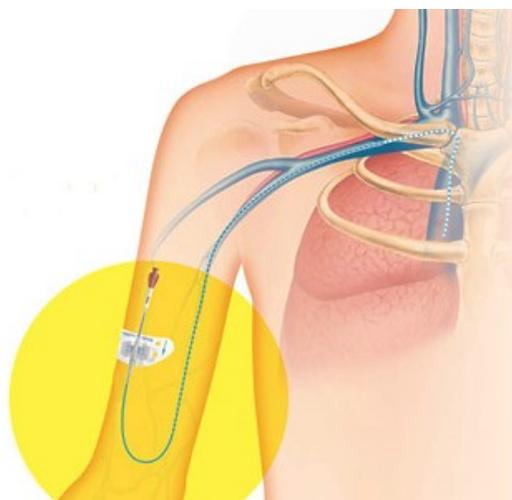


PICC（末梢留置型中心静脈カテーテル）とは

❖PICC（ピック）とは？

Peripherally Inserted Central venous Catheter の略称で、上腕の静脈（尺側皮静脈、上腕静脈）を穿刺し、先端を上大静脈に留置する新しいカテーテル挿入法です。他の中心静脈カテーテルと比べて、腕から比較的簡単に挿入でき致命的合併症が少ないため安全性の高い挿入方法です。また、皮膚温の低さや常在菌の少なさから感染症の危険も少ないことが特徴です。週に 1 回の消毒を行い、正しく管理することで長期間使用（当院では平均留置期間 70 日程度）できます。



*適応となる患者様

- ・入院や通院などで 5 日以上継続した輸液、または定期的な輸液が見込まれる
- ・末梢血管ルートの挿入が困難、または頻回な差し替えが必要
- ・化学療法で長期点滴が見込まれる
- ・血管刺激性の強い点滴治療が必要
- ・在宅療養で中心静脈カテーテルによる点滴管理が必要（特にターミナルステージでの緩和的薬剤の投与ルートの確保など）
- ・CV ポート造設への不安が強い、または拒否がある

*適応外となる患者様

- ・上肢に強固な拘縮があり、腕が十分に伸ばせない方
- ・認知機能低下などにより自己抜去の恐れのある方
- ・写真の体位になることが難しい方

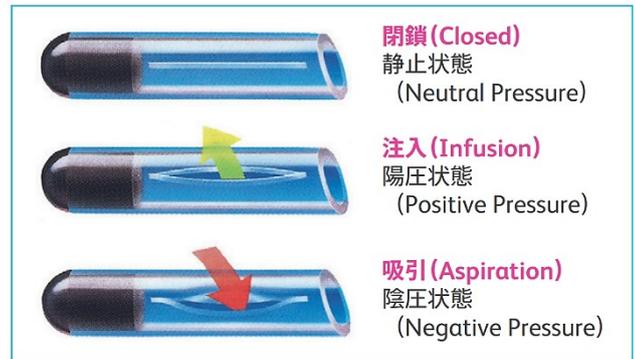


*使用する PICC について

- ・当院では主に 2 種類の PICC を使用しております。固定方法はいずれもスタットロックという固定具を使用した無針固定をしています。

1. グローシオンカテーテル (シングルルーメン) /カーディナルヘルス株式会社

特徴として、「3WAY バルブ」という圧がかかると開く構造で、逆流による閉塞が起こりにくく、週に 1 回の生理食塩水でのフラッシュで管理が可能です。長期間の留置に適しています (最長 2 年の留置経験あり)。
在宅療養の方は管理面の観点から基本的にグローシオンカテーテルで対応しております。



2. アローPICC (ダブルルーメン) /テレフレックスメディカルジャパン株式会社

オープンエンドタイプのため CV と同様に毎日ヘパリン生食でのフラッシュが必要です。複数の単独投与が望ましい薬剤の投与が必要な場合に適しています。閉塞のリスクはグローシオンよりも高くなります。

*管理方法と抜去方法について

- ・詰まり予防のための水通しは、グローシオンカテーテルでは週 1 回の生食フラッシュ、アローPICC では毎日ヘパリン生食のフラッシュが必要となります。
- ・週に 1 度、刺入部の消毒と包交 (CV などと同様)、延長ルートの交換を行います。(慣れると 10 分程度で行えます)
- ・スタットロック (無針固定具) は 2-4 週間程度で交換します (皮膚トラブルや剥がれていないかなどを観察しています)。
- ・抜去時は、固定しているテープ類を除去し、ガーゼを当てながらゆっくりと引き抜くのみで大変簡単に行えます。出血はほとんどありません。

PICC の種類の比較一覧表

商品名 (販売元) 管理方法	グローションカテーテル (メディコン)	アローPICC (テレフレックス)
製品画像		
ルーメン数	シングル	ダブル
カテ先の構造	グローション (圧がかかることでカテ先のスリットが開閉する)	オープンエンド
フラッシュ方法	生理食塩水 10ml	ロック用ヘパリン生食シリ ンジ 10ml
フラッシュ間隔	1週間に1回	毎日
造影剤などの 高圧注入	不可	可能
特徴	フラッシュ間隔が1週間開けることができるため、留置したまま自宅療養が可能	入院療養用。ただし、24時間持続の点滴投与や毎日フラッシュ出来れば自宅療養も可能

*PICC の利点と注意点

❁ 利点

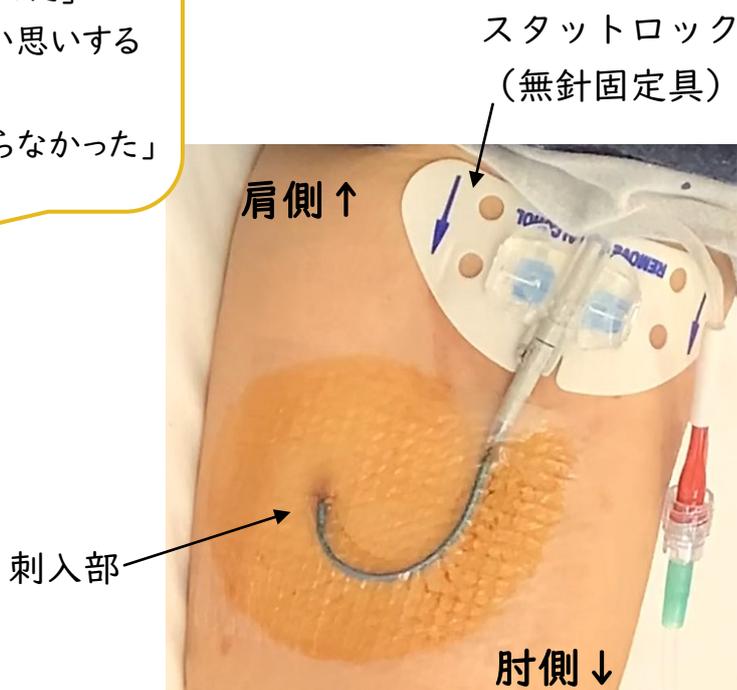
- ・一度挿入すると治療終了まで長期間使用できます。
- ・差し替えがなく、採血が行えるので穿刺による苦痛がなくなります
- ・上腕から挿入するので、鎖骨や首付近から挿入するカテーテルよりも肺や大きな血管を損傷するなど致命的合併症は起こりません。
- ・刺激の強い薬剤も安全に使用できます。
- ・万が一自己抜去した場合にも出血はほとんどありません。
- ・入浴時は保護カバーを利用することで誰でも簡単に保護が出来ます。

❁ 注意点

- ・まれにカテーテルの機械的刺激により血管炎を起こすことがあります。
- ・カテーテルが体外に出ているので、ひっかけないように注意が必要です。

～患者様からのご感想～

「何度も針を刺されることが無くなってよかった」
「お風呂で洗えないことは不便だけど、痛い思いすることが減ったから入れて本当に良かった」
「最初は邪魔かと思ったけど、全然気にならなかった」



旭川赤十字病院 PICC チーム